

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：柴田 昌和（しばた まさかず）
- (2) 年 齢：44 歳
- (3) 参加事業：第 11 回「世界青年の船」事業（1998 年）
国際青年の村 in 三重（1999 年）
「21 世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業（2001 年）
- (4) 職 業：アジア開発銀行 広報官



■ 参加のきっかけ

大学では国際関係学を専攻し、留学先のメキシコで知り合った友人の紹介で「世界青年の船」事業のことを知りました。紛争や貧困、気候変動や環境問題といった**国際社会が直面する課題**について多角的に考える力を養いたいと思い、その翌年に応募しました。

留学先をメキシコに選んだ理由は何ですか。

小学校から高校を卒業するまでアメリカに在住し、中学校からは外国語科目として、ラテン語を含めた五つの言語の中から一つを選択することができました。ナポレオンに興味があったので、フランス語を希望していたのですが、選考に漏れ、スペイン語を履修することになりました。学び始めるとセルバンテスやガウディ、ディエゴ・リベラなど、スペイン語圏の豊かな歴史や文化に魅力を感じるようになりました。さらにその理解を深めようと思い、大学の交換留学制度を利用してメキシコに留学しました。

当時、特に興味があった「国際社会が直面する課題」とは何でしたか。

1980 年代にアフリカのエチオピアで飢饉が発生したとき、当時通っていた幼稚園でユニセフの募金活動をしました。この活動を通じて初めて、世界には満足に食べられない自分と同年代の子供がいるということを知りました。中学生の時に参加したアムネスティ・インターナショナルの活動では、湾岸戦争に派兵された地元出身の兵士と 1 年間文通を続けました。また、1996 年のアメリカ大統領選挙の際には、民主党のボランティア要員として、有権者からの献金を募るためのファンドレイジング活動に参加し、クリントン大統領に 2 度会うことができました。さらに、高校で一緒にプレーしたサッカーチームのエースが旧ユーゴスラビア出身だったこともあり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争の終結の契機となった Dayton 合意が地元で結ばれたのも印象的な出来事でした。移民も多く、地域に根ざした市民運動が活発なアメリカ社会ならではの、**人権や貧困、紛争や気候変動などの問題を自分ごとに捉え、世界の国々との関わりについて関心を持つ**ようになりました。

■ キャリアパス向上にプラスになったこと

指導官によるセミナーは、国連の活動や国際協力の意義と役割について理解を深めることができました。また、様々な分野で活躍している参加者同士の交流は、自分自身のキャリア形成や人生設計を考える機会となりました。より良い世界を築くことに自分も関わりたいという決意が生まれたのもこの時でした。

当時の指導官セミナーの概要について教えてください。

主任指導官のラビンダー・マリク先生の「国連改革」他、6名の指導官による六つのセミナーがありました。それぞれ当時の国際的視野に基づいた講義でしたが、研究討論や意見交換の場ともなりました。

■ 特に影響を与えたプログラム

参加者が自主企画した「異文化コミュニケーション概論」が印象的でした。異文化コミュニケーションの様々な側面や要素や、コミュニケーション能力を構成する具体的なスキルについて体系的に学ぶことができました。



国会議員秘書時代にトランプ前大統領の首席戦略官だったスティーブ・バノン氏と

当該分野を大学等で専攻している学生が企画したのでしょうか。

そうです。当時、大学生だった参加者が企画したセミナーです。文化的次元を踏まえつつ、話し方や表情、ジェスチャーなどの重要な意味を持つノンバーバル・コミュニケーションの要素も含めて、自分や相手の考えや意見をスムーズにやりとりするためのポイントなどについて議論しました。

■ 民間等が主催する事業や留学と内閣府事業が異なる点

幼い時から海外の経験が長く、父の仕事の関係で幼少期をブラジル、その後はアメリカで11年間過ごしました。日本の大学に進学した後も、メキシコへの留学や、ヨーロッパ、中東、中南米を旅し、日本のことについて聞かれることが多くありました。内閣府主催の事業に、**日本代表団の一員として参加**できたことは、自分の中で大きな自信につながりました。**日本人としての自覚と誇りを持つとともに、地球市民の一人として、その後の世界観と人生観に大きな影響**をもたらしました。

内閣府事業ならではの強みとは何だと思えますか。

国際交流と言えば、アイセックとか日米学生会議といった団体もあり、これらも素晴らしいものだと思います。しかし、国の事業に参加するということは特別な意味を持ちます。各国参加者の代表による内閣総理大臣への表敬訪問や各寄港地での表敬訪問をはじめ、国内研修、地方視察の際には、駐日外国公館や県庁への表敬などもあり、第11回事業のテーマでもあった、多文化共生社会（Celebrating Diversity）の実現に貢献できるよう、その一翼を担う者としての**役割と責任を自覚**しました。

また、参加者についていえば、政府や企業、市民社会やメディア、教育機関の関係者をはじめ、アスリートやミュージシャンとして活動している者など、性別や年齢、国籍や職業の属性に加え、価値観やライフスタイルなどの思考に係る多様性にも富んでおり、それぞれの国や立場を代表して参加しているという意識を強く持っていたと思います。各国の事業参加者と議論を重ねることによって、私たちの**世界が抱える複雑で多様な課題について問題意識を共有**できたことは、その後の人生において貴重な財産となりました。

■ 事業参加の経験が現在のキャリアパスに与えた影響

ITコース実行委員として携わった「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業などを契機に、それまで勤めていたIT企業を退職し、広告代理店に転職しました。トヨタ自動車のグローバル・ブランディングやデジタルマーケティング施策などを担当しつつ、新たなフィールドでこれまでの経験を活かしながら挑戦してみたいと思い、国連職員として働くための準備をしました。

まずは国連ボランティアとして、国連開発計画（UNDP）アンゴラ事務所では、市民社会を繋ぐ IT インフラ環境の整備事業に携わり、ユニセフ・タン事務所および国連基金・計画カーボヴェルデ常駐調整官事務所では、広報・渉外を担当しました。スウェーデンの大学院で「開発コミュニケーション学」の修士号を取得し、JPO 派遣制度を通じて、ユネスコ東アフリカ地域事務所（在：ケニア、ナイロビ）では、メディア専門官として、紛争予防や平和構築のためのメディア・セクター支援事業に従事した他、広報官として 13 か国を管轄する域内の広報戦略を総括しました。その後もケニアで培ったネットワークを活かし、在ケニア日本大使館では、政府開発援助（ODA）を用いたパイやマルチの経済協力案件に携わった他、安倍総理の中東および北欧・バルト三国訪問の際には、外国プレスプログラムを総括しました。帰国後は、内閣総理大臣補佐官などを務めた衆議院議員の秘書として議員外交を補佐する業務に従事し、現在はアジア開発銀行駐日代表事務所で広報官として勤務しています。



安倍総理のラトビア訪問の際、ラトビア大統領府カウンターパートと記念撮影

「異文化理解」や「国際協調」と聞くととても難しいものに思えますが、結局は**個々の人々が心を通わせ合い、相手を理解しようとする気持ちから生まれるもの**だと思います。

約 60 日間におよぶ航海は、豊かな心を育む深い学びがあり、自然の偉大さを実感させ、海への親しみをより一層深めるきっかけとなりました。世界青年の船は、国際社会を生きる知恵を鍛えてくれる場所であり、そこで**築かれた世界に広がる絆は、今日まで健在**です。

ルネッサンス事業での経験が転職を意識するきっかけになったのでしょうか。

そういうわけではないです。小学校の卒業文集で、将来は国際機関で働きたいと書いていました。世界青年の船に参加した後、日本語を母語としない在日外国人の日本語学習をサポートするボランティア活動を続けたり、ルネッサンス事業など、日本青年国際交流機構が実施する様々な活動に参加したりすることにより、青年らの背中を押す何らかの手助けができればと思っていました。

具体的にどんな場面でこの絆を感じるがありますか。

事業を修了してからも仕事やプライベートでお互いの国を行き来したりしていました。家族ぐるみの付き合いをしているので、結婚式に呼ばれたり、一緒に家族旅行をしたりすることもありました。日常にふと連絡を取り合うなど、何でも話しやすい間柄です。新型コロナのパンデミックの影響で、外出制限や渡航禁止措置を取っている国や地域もあり、以前のように自由に行き来はできませんが、SNS などの普及で、コロナ禍の中でも今までと変わりなく、人生のあらゆるステージでキャッチアップしています。

■ 船内活動でスキル向上に役立ったプログラム

参加者が主体的に考え、自らの行動力をもって進めていくセミナーやクラブ活動などの**自主企画は、数々の感動、興奮、涙など忘れられない場面**がありました。広島県のメンバーやアメリカの代表団の一員が中心となって企画したピースセミナーでは、戦争のない平和な社会の実現に向けた課題とその解決の方向性について議論を深めました。同県の小中学生が平和への思いを込めて描いた作品がホール一面に飾られた中で、よりよい未来を築くための参加者の思いが一つになって行くのを感じました。セミナーの最後に参加者全員で歓喜に溢れたゴスペルを合唱した時の感動は今でも忘れられません。まさに船の参加者全員が一体となった瞬間でした。

また、サルサやハカ、和太鼓や書道、そして映画評論や口承芸術（ストーリーテリング）、演劇など、学習成果の発表に向けて**参加者それぞれが準備していくプロセスは、すばらしい学びの機会**になりました。

寄港地活動では、エクアドル・グワイヤキルの新聞社の見学やアカブルコの闘牛の観戦、トンガのカヴァの儀式やソロモン諸島・ガダルカナル島における慰霊碑訪問などの体験は、**相互理解や友好を深める上で大変意義深いもの**となりました。



ケニアのユネスコ加盟 50 周年式典行事にて

自主企画を進める際に、困難な場面に直面することがありましたか。

エクアドルに寄港した際に同国の法務大臣が暗殺されるという事件があり、安全対策の一環として、寄港地活動の内容が急遽変更されました。また、島嶼国出身の参加者は、日の入りと共に寝て日の出と共に起きるアイランドタイムが生活リズムとなっていることや、中南米からの参加者も、ラテンで陽気な明るさからか時間に厳格ではないところがあり、様々な状況に応じて、臨機応変に対応することが求められました。

具体的にどんなことが「すばらしい学びの機会」だったと思いますか。

日本人 120 名、外国人 160 名が集まると、いろんな「引き出し」があります。その引き出しの多さに圧倒されました。特に、参加国団単位で行うナショナルプレゼンテーションでは、大勢が集まって一つの演劇作品を作り上げていくのですが、そこにはかなりのクリエイティビティが必要です。リーダーシップだったり、表現力や集中力、想像力を引き出すことだったり。映像、音響、照明などの様々な演出手法を用いなが、それぞれの思いを込めたテーマを舞台上で表現していくその過程にすばらしい学びがあったと思います。

体験学習は具体的にどんな意味で「意義深い」と感じましたか。

第 11 回「世界青年の船」事業で訪問したソロモン諸島は、歴史を学ぶとガダルカナル島をめぐる攻防を思い起こします。日本政府などが実施する戦没者遺骨収集帰還事業に携わるソロモンの参加者からオリエンテーションがあり、日米双方の戦没者慰霊碑などを訪問しました。また、アカブルコから東京を結ぶ航路では、途中ハワイで給油し、ミッドウェー島や硫黄島なども洋上から見ることができました。私たちが享受している平和と繁栄は、戦争によって命を落とされた多くの方々の尊い犠牲の上に築かれたものであることを改めて強く認識しました。

また、王政が残るトンガでは、カヴァの儀式を体験しました。カヴァは、鎮静作用のある飲料で、ある種の木の根っこを乾燥後粉末にし、水を加えて漉したものを飲用します。男性は夜の集会などで、ゴザの上に車座になって会話を楽しみながら、カヴァを順々に飲み干します。たとえ言葉は分からないとしても、このようなイニシエーションを通して相手の文化や社会を理解できるようになることは非常に意義深いものと考えます。

■ 船を用いた国際交流事業の意義とは

360 度見渡す限り広がる大海原。日々の喧噪から離れた、まさに非日常の船上生活は、私たち一人一人の人生観と世界観に強い印象と影響を与えるものでした。非日常的な空間で自分と向き合い、多様な関係者が協働することによって生み出されるチームとしての一体感、そして、共通の感動体験を通じてできた人と人の絆は、一生に一度の財産になりました。

■ 事業参加時の国際的・地域的な人的交流



第 11 回「世界青年の船」事業の仲間と船上にて

世界青年の船に参加してから 20 年以上が経つ現在も、インターネットを介した交流や互いを訪問し合うことで、国内外の参加者と親睦を図っています。私が務めるアジア開発銀行などの国際機関は、様々な国籍の人が集まり、それぞれの能力や専門性を活かして、世界の公益に尽くすために活動をしています。**日本および諸外国の参加者と育まれた絆は、平和や国際貢献の精神を育むものであると確信しています。**

柴田昌和氏プロフィール

三重県鈴鹿市生まれ。2001 年、慶應義塾大学総合政策学部卒。スウェーデンの大学院で開発コミュニケーション学の修士号を取得。IT 関連企業、広告代理店勤務を経て、UNDP アンゴラ事務所では IT 専門官として、ユニセフブータン事務所およびカーボベルデ国連常駐調整官事務所では広報官として勤務。ユネスコ東アフリカ地域事務所では、メディア専門官として、紛争予防や平和構築のためのメディア・セクター支援事業に従事した後、同事務所広報官として 13 か国を管轄する内外広報戦略を管理。在ケニア日本大使館二等書記官。衆議院議員の秘書などを経て、2019 年 8 月から現職。